

『改訂版 健康長寿診療ハンドブック』 正誤表

『改訂版 健康長寿診療ハンドブック』（2019年6月10日 第2版第1刷 発行）におきまして、誤りがございました。

ここに深くお詫び申し上げますとともに、訂正申し上げます。

(2020年4月29日 メジカルビュー社編集部)

ページ	誤	正
<p>p.36, 図3</p>	<p>図3 原発性骨粗鬆症の薬物治療開始基準</p> <p>#1: 軽微な外力によって発生した非外傷性骨折。軽微な外力とは、立った姿勢からの転倒が、それ以下の外力をさす。 #2: 形態椎体骨折のうち、3分の2は無症候性であることに留意するとともに、鑑別診断の観点からも脊椎X線像を確認することが望ましい。 #3: その他の脆弱性骨折；軽微な外力によって発生した非外傷性骨折で、骨折部位は肋骨、骨盤(恥骨、坐骨、仙骨を含む)、上腕骨近位部、橈骨遠位端、下腿骨。 #4: 骨密度は原則として腰椎または大腿骨近位部骨密度とする。また、複数部位で測定した場合にはより低い%またはSD値を採用することとする。腰椎においてはL1~L4またはL2~L4を基準値とする。ただし、高齢者において、脊椎変形などのために腰椎骨密度の測定が困難な場合には大腿骨近位部骨密度とする。大腿骨近位部骨密度には頸部またはtotal hip (total proximal femur)を用いる。これらの測定が困難な場合は橈骨、第二中手骨の骨密度とするが、この場合は%のみ使用する。 #5: 75歳未満で適用する。また、50歳代を中心とする世代においては、より低いカットオフ値を用いた場合でも、現行の診断基準に基づいて薬物治療が推奨される集団を部分的にしかカバーしないなどの限界も明らかになっている。 #6: この薬物治療開始基準は原発性骨粗鬆症に関するものであるため、FRAX®の項目のうち椎質コルチコイド、関節リウマチ、続発性骨粗鬆症にあてはまる者には適用されない。すなわち、これらの項目がすべて「なし」である症例に限って適用される。</p> <p>(日本骨粗鬆症学会：骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン2015年版 より引用改変)</p>	<p>図3 原発性骨粗鬆症の薬物治療開始基準</p> <p>#1: 軽微な外力によって発生した非外傷性骨折。軽微な外力とは、立った姿勢からの転倒が、それ以下の外力をさす。 #2: 形態椎体骨折のうち、3分の2は無症候性であることに留意するとともに、鑑別診断の観点からも脊椎X線像を確認することが望ましい。 #3: その他の脆弱性骨折；軽微な外力によって発生した非外傷性骨折で、骨折部位は肋骨、骨盤(恥骨、坐骨、仙骨を含む)、上腕骨近位部、橈骨遠位端、下腿骨。 #4: 骨密度は原則として腰椎または大腿骨近位部骨密度とする。また、複数部位で測定した場合にはより低い%またはSD値を採用することとする。腰椎においてはL1~L4またはL2~L4を基準値とする。ただし、高齢者において、脊椎変形などのために腰椎骨密度の測定が困難な場合には大腿骨近位部骨密度とする。大腿骨近位部骨密度には頸部またはtotal hip (total proximal femur)を用いる。これらの測定が困難な場合は橈骨、第二中手骨の骨密度とするが、この場合は%のみ使用する。 #5: 75歳未満で適用する。また、50歳代を中心とする世代においては、より低いカットオフ値を用いた場合でも、現行の診断基準に基づいて薬物治療が推奨される集団を部分的にしかカバーしないなどの限界も明らかになっている。 #6: この薬物治療開始基準は原発性骨粗鬆症に関するものであるため、FRAX®の項目のうち椎質コルチコイド、関節リウマチ、続発性骨粗鬆症にあてはまる者には適用されない。すなわち、これらの項目がすべて「なし」である症例に限って適用される。</p> <p>(日本骨粗鬆症学会：骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン2015年版 より引用改変)</p>